

平成 21 年度(2009)  
個展を前提とした作品制作研究(17)  
第17回個展・画廊沖繩 in Haebaru

金城 満

1. 展覧会名:

金城満展 --Sweet400シリーズ--

2. 趣旨:

金城満とInstall-1609 企画展について

金城満氏に今回の特別企画展= Install-1609=の趣旨内容を話したのは、昨年(2008)の正月を過ぎたころだった。(中略) 1609年の薩摩の琉球侵略支配から今年2009年は、ちょうど400年の節目の年にあたる。薩摩侵攻以降の江戸時代から琉球処分、皇民化教育、沖縄戦、米軍統治、日本復帰と歴史をなぞり、金城氏らしい自在な切り口で、話題が飛び交い会話が弾んだ。やがて現在の沖縄の状況論に話がおよぶと、「アメとむち政策」、「巨大化する米軍基地」、「癒しの島」、「観光産業」、「不労所得」「全国一高い失業率」、課題山積の現実に表情が曇った。地元住人の我々が感じる「沖縄像」と観光客や外から眼差される「沖縄像」が乖離した現実があること。消費されるアイテムと虚像化し、「肥大化する沖縄像」がまかり通る不思議な現実、など、。未来の沖縄像に「不安」が共振した瞬間だった。(画廊主企画案より)

3. 材料技法

綿布に石膏地、顔料、ニカワ箔

4. 展覧会場

画廊沖繩 〒901-1114 沖縄県南風原町 373

5. 展覧会期

2009年01月17日(土)～31日(土) 休み:1月19日、26日(月) ※13日間

6. 開館時間

11:00～18:00

7. 観覧料金

無料

## 8. 企画

画廊沖繩

## 9. 作品リスト (pp. 3-11)

No.	作品名	サイズ (cm)	材 料	制作年月	備 考
271	Sweet400-blue sugar-	116.0 x 180.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
272	Sweet400-red sugar-	116.0 x 180.1 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
273	Sweet400-double sugar-	210.0 x 360.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
274	Sweet400-brown sugar-	128.0 x 180.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
275	Sweet400-sugar coat1-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
276	Sweet400-sugar coat2-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
277	Sweet400-sugar house1-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
278	Sweet400-sugar house2-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展
279	Sweet400-sugar house3-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年	第17回個展

## 10. 関連イベント (pp. 13-15)

アーティスト・トーク

日時=2009年01月17日 (土) 18:00~

会場=画廊沖繩

出演=金城満

## 11. 考察 (報道等資料) (pp. 16-22)

- (1) 沖縄タイムス 2009. 01. 28 展評/高良勉
- (2) 沖縄タイムス 2009. 02. 06 1月美術月評/佐藤文彦
- (3) 沖縄タイムス 2009. 12. 28 初の年間企画を展開/上原誠勇
- (4) 琉球新報 2010. 01. 13 おきなわ美術コラム「視線」/上原誠勇
- (5) The Gallery Voice-No. 37 より
  - ① Sweet400 「彷徨える砂糖たち」 (美術家/金城満)
  - ② 400年の淘汰とミーム (琉球大学准教授/杉尾幸二)
  - ③ 工工四に込められた、声なき声を聴く  
(県立芸術大学講師/三島わかな)
  - ④ 金城満と Install-1609 企画展について (画廊主/上原誠勇)



POST CARD

=Install-1609=

金城満展 2009年1月17日(土)~31日(土)  
=Sweet400=

19日・26日(月)休廊  
Am11:00~Pm6:00

今年には薩摩の琉球侵略支配(1609年)以来400年になります。この歴史の節目の年にあたり、美術による未来の沖縄像を探り試みる企画展を行います。第一回は「石の声」「鉄の記憶」で知られる美術家、金城満(1959年生まれ)氏が歴史400年に視線を注いだ新作Sweet400シリーズを発表いたします。

\*初日(1/17)は午後6時より作家トークとオープニングパーティーをいたします。お気軽にご参加ください。



画廊沖縄

〒901-1114沖縄県南風原町神里373  
TEL/FAX(098)888-6117  
www.galleryokinawa.com



MITSURU  
KINJO  
EXHIBITION

2009  
1/17-1/31  
Am11:00-Pm6:00

「Sweet400~brown sugar~」 顔料、膠、箔、油彩、板 128×180cm

画廊沖縄  
Gallery Okinawa



SWEET400-BLUE SUGAR-

116×180cm 2009年顔料、  
ニカワ、箔、油彩、板



SWEET400-RED SUGAR-  
116×180cm 2009年顔料、  
ニカワ、箔、油彩、板



SWEET400-DOUBLE SUGAR-

210×360cm 2009年顔料、  
ニカワ、箔、油彩、板



SWEET400-BROWN SUGAR-

128×180cm 2009年顔料、  
ニカワ、箔、油彩、板





SWEET400-DOUBLE SUGAR-

210×360cm 2009年顔料、ニカワ、箔、油彩、板



SWEET400-SUGAR COAT1,2 (上から) -

各60×90cm 2009年顔料、  
ニカワ、箔、油彩、板



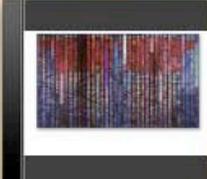
SWEET400-SUGAR HOUSE1,2,3-(左から)

各96×60cm 2009年顔料、  
ニカワ、箔、油彩、板



作品は数点を同時進行で制作して行った。

**Sweet400シリーズ**  
2009年1月の個展、楽譜がモチーフの絵画作品をもとにした4曲です。(作曲：2009年)

 <p><b>double sugar</b> 作品に使用した琉球音楽の構成音「工四乙四（ド・ファ・レ・ファ）」と、交通法規を素材に増幅していく。 (時間/3 : 35) ・絵の制作過程を見ながら聴く</p>	 <p><b>blue sugar</b> 左の曲同様4つの音と水や泡がモチーフ水底に沈んで行く肉体と、昇天してゆく魂。 (時間/3 : 40)</p>
 <p><b>sugar house</b> サーターヤー (砂糖の家) それは甘い匂いと闇の中にあった。 (時間/2 : 58)</p>	 <p><b>sugar coat</b> 苦い薬を甘く包み込んだ糖衣である。つらい話を甘く包み込んだおはなしである。甘さに浸りたいとき聴いてください。 (時間/2 : 59)</p>

top news works photo&movie music designbox projects

同タイトルの音楽制作も同時に行った。ホームページ「金城満の仕事」で聴くことができる。  
<http://homepage.mac.com/mkingmking/>

2009/01/17～01/31

第 17 回個展・画廊沖縄 in Haeburu

**Sweet400 シリーズ**

**プレゼンテーションレジュメ**

日時：2009 年 01 月 17 日（土）18:00～

会場：画廊沖縄

使用ソフト：Keynote

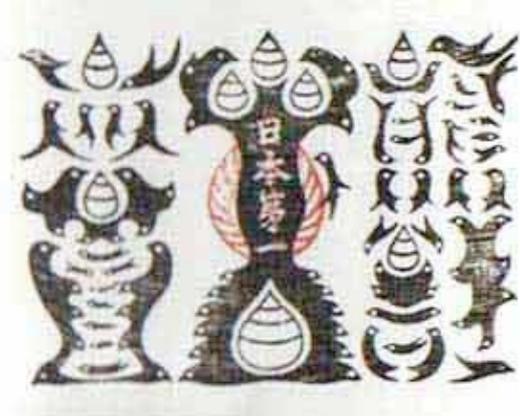
時間：40 分（映像含む）

## 1. 本日の内容

- Sweet400とは
- 作品の構成要素について
- 制作のプロセス
- その他の展開

## 2. 起請文

起請文(きしょうもん)は、日本でかつて作成されていた、人が約束や契約を交わす際、それを破らないことを神仏に誓う文書である。



起請文

## 3. 砂糖について



糸満市与座地区、かつての製糖工場の門

(1)インド、ベトナム、中国南部を経て沖縄に移入、1420年代後半には栽培が行われていた。製糖法は、1623年に儀間真常が中国へ使者を派遣しその技術を習得させたのがはじまり。圧搾機も時代とともに木製、石製、鉄製へと変わっていった。

(2)砂糖の甘みは幸福感に満ちている。しかし砂糖は肥満や糖尿病等の原因になる食品として問題視されることもあるし、習慣性、依存性も指摘されている。

(3)甘い痒さ

心地よいのか不快なのか、どこか痒い。搔く事が習慣化し、原因を探さない。原因があるのかさえもわからない。

(4)甘さの中を、彷徨っているのか漂っているのか、どこへ向かっているのか私自身、不明である。しかし確かに身体のどこかが

痒い。掻こうとするとその場所が分からなくなる。

(5)静かに自覚しようとする、静かに移動している。自覚できないのに移動を感じる矛盾である。おそらく誰もが生まれながらに持っているものかもしれない。

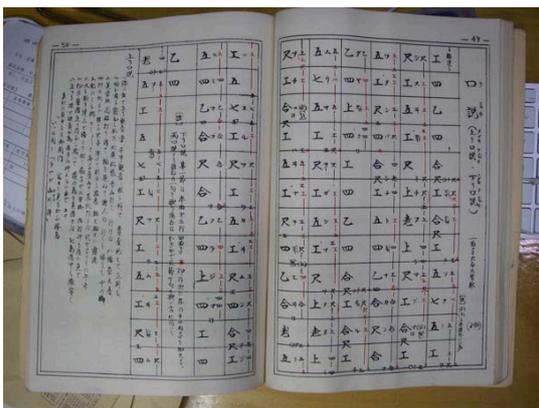
(6)または、この島にある精神的風土病かもしれない

#### 4. 作品の構成要素

(1)原稿用紙の升目について

(2)刷り込まれた文字は工工四

(3)楽譜、文章の方向性



工工四の説明

#### 5. 制作のプロセス

自作の曲にあわせ映像で説明

(1)時間の流れで見てみましょう



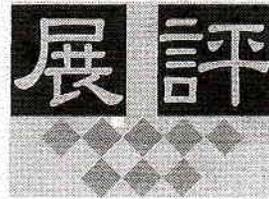
制作プロセスを記録した映像 (5分)

(2)作品別に見てみましょう

#### 6. その他の展開

(1)演奏したらどうなるか

(2)映像化したらどうなるか



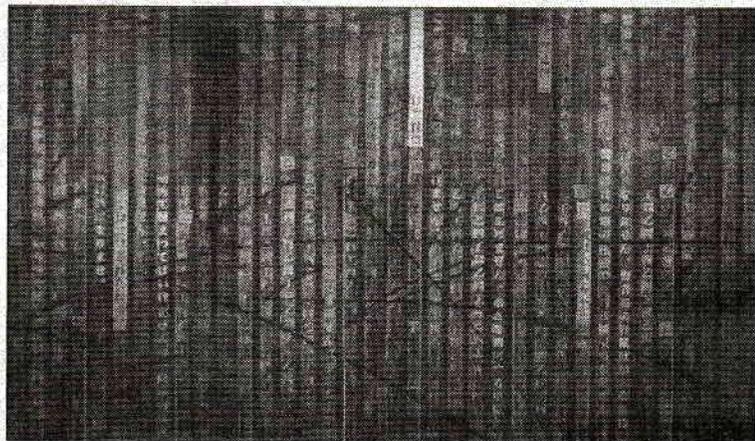
高良 勉

収穫期に入ったサトウキビ畑に囲まれ、画廊沖繩で「金城満 個展『Sweet400』」を見た。今年は、一六〇九年の薩摩侵略以来四百年目、一八七九年の明治政府による琉球処分以来百三十年の大きな歴史の節目を迎えた。

すでに、奄美諸島から八重山諸島にいたる琉球弧の各地で新聞、マスコミをはじめ諸個人や団体がこの歴史の節目を問い直す取り組みを始めている。琉球弧の歴史や現在、そして未来にとつて薩摩侵略や琉球処分の与えた意味や影響は何か。

それは、琉球弧の私たちはもちろん日本社会全体にとつても大きな課題であろう。そして、学術のみならず芸術や思想の表現者たちも避けて通ることばできない。画廊沖繩は、「この歴史の節目にあたり、美術による

金城満展＝Sweet400＝



金城満作「Sweet400-double sugar」

琉球と薩摩 重層的な問い

れの作品も、桐板の上に箔が張られ、その上に膠や顔料や油彩が塗り重ねられ、磨かれ削られさらに描くという複雑な技法で制作されている。作品全体が濃厚な質感を持ち、多様なイメージが触発される。印象に残る色彩は、深みのある赤茶と紺と緑と黒だ。

どの作品にも縦の方向に原稿用紙やフィルムを連想させる線が下書きされ、硬質のリズムを作っている。そして、一つ一つの升目に文字や文章や音楽が刷り込まれている。三枚の写真も、いくつかの文章が書き込まられ、塗りつぶされている。くり返し象徴的に表れるのは、琉球音楽の楽譜である工四四の「工四乙四」という音譜だ。そ

未来の沖縄像を探り試みる企画展を行います」と宣言した。その第一回に込めたのが、「石の声」「鉄の記憶」で著名な美術家・金城満である。

金城は、この個展を「Sweet400」と名付け「彷彿える砂糖たち」に象徴化した。S

w e e t は、金城にとつて「甘い痒さ」とも表現されている。会場に入ると「Sweet400 double sugar

r」(二百十×三百六十センチ)の大作や茶、青、赤の「sugar」シリーズ三点をはじめ九点の作品が展覧されている。い

う、琉球古典音楽の基調音とも言えるあの「トウンテンテント」のメロディーである。

それにしても、なぜ砂糖と「工四乙四」なのか。それが、金城にとつて四百年の歴史から感受するさまざまな思考とイメージの「文化遺伝子」の一つである

う。赤、青、茶の砂糖たち。まだ結晶化はしていない。石の声を聴いた金城は、砂糖の声と不協和音の音楽を聴いたと言えよう。周知のように、琉球侵略を行った薩摩藩は、琉球の黒砂糖と中国貿易の利益を収奪する事によって藩財政を建て直し、明治維新の原動力の大藩となった。それがまた、琉球処分をもたらしたのだ。

したがって、私にとつて砂糖は現在まで続く琉球弧の植民地状況のイメージと切り離せられない。それは、台湾や東南アジア、南洋諸島、ハワイ諸島、カリブ海、アフリカまでの植民地体験やクレオール文化につながっていく。それ故、私も詩・文学でサトウキビ労働について作品化を追求してきた。

とまれ、金城の思想的作品は四百年の歴史と未来をどう感受するか、見る者一人一人に重層的に問いかけてくる。砂糖は甘いか、苦いか、痒いか。

(詩人)

◇ ◇

「金城満展『Sweet400』」は南風原町の画廊沖繩で31日まで。問い合わせは同画廊、電話098(8888)6117。

# 沖縄タイムス

平成21 (2009) 年02月06日

第3種郵便物認可

## 美術月評

<1月>

佐藤 文彦

今年は薩摩の琉球侵攻四百年の節目にあたり、それに関連する企画が新年早々からスタートした。美術の分野でも、南風原町の画廊沖繩が未来の沖繩像を探る企画を立てた。そのはじめにもってきたのが金城満である。

金城満展「Sweet 400」

(十七―三十一日、画廊沖繩)。出品された大小九点、いずれも硬質感を感じさせるマチエールである。桐製のパネルに直接顔料や箔を膠で施し、その上に何度も描いては削る作業を重ね、最後は油彩で仕上げた技法を丹念に用いている。しかし、表面に描出されたものは形而上学的な隠喩に満ちている。映画のフィルムを思わせる縦にのびた強いストライプの線と、原稿用紙を思わせ

今回のメインである特大級(二二〇×三六〇センチ)の作品の前に立ったときも漠然とした時間を長く感じていた。そのとき、画廊のオーナーである上原誠勇氏が「この工四の音源もありますよ」と言って、金城の自作の音響を廊内に流した。そ

## 浮遊感と気怠さ錯綜

金城満展「Sweet 400」

のことによって、一瞬にして迷宮から抜け出る糸口を見いだしたのであった。私事に至って恐縮だが、筆者自身が見知らぬ沖繩へ来た時のアイデンティティの体験につながるものであった。親類縁者も居ない異郷の地へ赴く不安を解消させてくれた三線の記憶によって、金城満の作品がずっと身近に感じられたのである。タイトルの「Sweet

et」は薩摩が琉球を搾取したときの砂糖に関連するイメージだとは思うが、「Sweet 400―red sugar―」という作品は涼傘を思わず浮遊感と気怠い感覚(作者の言う「甘い痒さ」)が錯綜しているように見えて、金城作品の次へのステップを感じさせるものがあった。



「金城満展『Sweet400』」より「Sweet 400―blue sugar―」

「薩摩の琉球侵攻400年にちなみ、初めてとなる年間企画を展開した画廊沖縄代表の上原誠勇さん。工工四をモチ



フにした金城満さんを皮切りに、昭和天皇のコージウ作品で話題となった大浦信行さん、ニューヨークで活躍する照屋勇賢さん、東京を活動拠点とする彫刻家の儀保克幸さんを紹介した。「美術が社

### 初の年間企画を展開

魚眼

レンズ

会の中でどのぐらいの役割を持っているのか、仕掛け」として400年をテーマにした。私自身もいろいろ考えさせられた」と初めての試みを振り返る。同企画は、約10年前に大浦さんの作品「遠近を抱えて」を入手したときから温めていたという。「ことは琉球処分から130年でもあり、政権も代わった。歴史の大きなうねりを感じる年だった」と、行く年に思いをはせている。

琉球新報2010/01/13



美術は歴史の課題にどのようなアプローチが可能か。昨年の薩摩侵攻400年、「Instal-l-609」展は美術ファンとして純粋な発想から企画したものであった。琉球の薩摩支配下と江戸幕府への従属、さらに中国との冊封外交。その関係を当時の尚寧王は、今で言う「苦渋の選択」をしたのか、それとも「強いられた」いや「主体的選択」だったのか。薩摩の暴力的な誓約書「起請文」に、ただ一人「NO」を突きつけ斬首された謝名親方の存在が気になる。王と謝名における選

おきなわ美術コラム

### 視線

上原 誠勇

扱の距離と主体認識は今日でも問われるところだろう。その根底には、今日の沖縄の自衛隊基地受け入れや、米軍基地問題における「自己決定権」と「主体性」に通じる同質の問題が内包していると思える。同企画展は400年の長い時間が過ぎた現在から、その心性の本質に迫る試みであった。同時に世界のマインリティーが抱え込まされた大きな普遍的課題に通じると思われたのである。琉球の伝統音楽をベースに、時空に潜伏するモノに敏感に反応し、むす痒い身体を可視化した金城満。昭和天皇像をコージウして日本近代と沖縄の昭和史をあぶり出した大浦信行。紅型の技法を現代美術に取り込み、琉球・沖縄のヒーローたちを描いた照屋勇賢。太平洋戦争の戦渦の中、空を

## 真の意味の「友好」とは

見つめる沖縄の少女の写真からデッサンをおこし、未来のかなたを見つめる木彫刻の少女像を生んだ儀保克幸。企画者として十分な手応えであった。4氏の作品には、歴史の地下深く、岩盤のように横たわるヤマトと沖縄の問題を浮き上げ、本質に迫るものがあった。昨年夏、55年体制の政治から政権が変わり、政局が様変わりした。鳩山由紀夫さんの「対等な日米関係」は刺激的だ。裏をかえせば対等ではない現実認識ということだ。昨年からの新聞やテレビのニュースで、連日普天間基地問題が流れる。異外、国外、現案の辺野古、いや嘉手納、伊江島、下地島などと、米国高官の高圧的な発言におびえ、コロコロ変わる関係各大臣の姿がみられる。普天間問題は「沖縄の問題」、まるで人ごとのようなニュアンスで報じる本土メディア。名護市が辺野古を受け入れたら万事OKで済む問題か？ ヤマトの人は沖縄を足で踏みつけている自分に気が付かないのか？ 分かっていて、分らないふりをしているのか。目の前(国内)に対等でない現実がある。今年日米安保改定50年を迎える。安保は同盟に変化し軍事(暴力)的圧力による友好関係の構築にほかならない。隣国の韓国や中国とは友好だろうか。真の意味で「友好」とは？ 今年はこのシンフルな問題が問われそう。画廊企画は「安保Friendship」をテーマに展開を予定している。このハードコアな問題に美術がどのようにカタチを表すか楽しみだ。(画廊沖縄代表)

# The Gallery voice

NO-37

編集・発行／画廊沖縄〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2009.1.17  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

## Sweet400 ～彷徨える砂糖たち～

金城 満

砂糖の原料のさとうきびは、インド、ベトナム、中国南部を経て沖縄に移入、1420年代後半には栽培が行われていた。製糖法は、1623年に儀間真常が中国へ使者を派遣しその技術を習得させたのがはじまり。圧搾機も時代とともに木製、石製、鉄製へと変わっていった。首里王府は、換金作物としてさとうきびを重視し、栽培の制限や専売制を実施。明治12年の廃藩置県まで統轄していた。

近世から現代まで沖縄の歴史をみる場合、砂糖無しでは考えられない。

砂糖の甘みは幸福感に満ちている。しかし砂糖は肥満や糖尿病等の原因になる食品として問題視されることもあるし、習慣性、依存性も指摘されている。

□この標示の中に入っははいけません。

甘い痒さ。心地よいのか不快なのか、どこか痒い。搔く事が習慣化し、原因を探さない。原因があるのかさえもわからない。

甘さの中を、彷徨っているのか漂っているのか、どこへ向かっているのか私自身、不明である。しかし確かに身体のどこかが痒い。搔こうとするとその場所が分からなくなる。静かに自覚しようとする、静かに移動しているのがある。自覚できないのに移動を感じる矛盾である。おそらく誰もが生まれながらに持っているものかもしれない。または、この島にある精神的風土病かもしれない。

□警音器を鳴らし続けなければならない。

水平、垂直、斜め、一つおきに、二つおきにと視線は画面を彷徨う。そのうち画面上に痒い箇所がでてくる。そこを描く。その繰り返しである。

音の記号である楽譜は通常、左上から右上へ、水平に時間が流れていく。繰り返したり、速くなったり、強くなったり、休んだり、消えていったり、重なったり、複雑に響いていく。しかも、同じ音は無い。測定上、同じ音でも条件で違ってくる。

琉球音楽の楽譜である工工四は右上から左下、垂直に時間が流れていく。いずれも始点は、どちらも上である。これは、水平垂直、文章表記とも共通している。

□最大積載量とは重さそのものではありません。

原稿用紙の比率は美しい。升目も美しい。そう思うと、調和のとれた升目を壊さないかと心配で、作文できない。しかし升目が無いと不安で作文できない。二重の言い訳である。

Sweet400、画面上の刷り込まれた原稿用紙に、刷り込まれた文字は工工四。しかも「工四乙」三つの音のみで構成されている。音の順番は「工四乙四(ド・ファ・レ・ファ)」。

この繰り返しははじめから最後まで連続し重なっている。不協和音と二重性、過剰な依存性、升目に浮かぶ亡霊たち。時間の断片と、断片の時間。

絵画である視覚言語は、重層したもの、透過したもの、反射したもの等の組み合わせである。その組み合わせにゆっくり近づき、そっと捕まえる。捕まえた瞬間、砂になる。無意識が意識化され逃げた瞬間である。

□追越しは道路の右側部分にはみ出してください。



制作中の金城満

2009.1

言葉だけで考えようとする、私の場合、考える言葉を持ち合わせていない。言葉を的確、厳密に使うとすると隙間がなくなり息苦しく、私の場合吃ってしまう。だから吃っている時程、言葉で考えている気がする。原稿用紙に書かれた音楽。画用紙(板)に書かれた作文。楽譜に描かれた絵。その隙間を黒く感光したフィルム。歴史に被曝した黒いフィルムが走る。

□安全地帯である事を示します。

日本へのカメラの伝来は、一説には1841年にオランダ船によって島津藩の商人が購入し、島津藩主の島津斉彬に献上し撮影されたという。また、日本最古の写真は1854年(嘉永7年)にペリー率いる黒船が浦賀沖に来航した折、黒船に同乗していた写真家が撮影したもので、南は琉球から下田・横浜・函館と北上しながら、日本の風景などを撮影していた。その中の浦賀奉行所の役人を撮影したものが最古の写真とのことである。

記憶の闇と、闇の記憶。原稿用紙の升目と、升目の原稿用紙。言葉の幽体離脱、音の幽体離脱、色の幽体離脱、かたちの幽体離脱。

□歩行者は通行できません。

Sweet400-double sugar-画面上に、三枚の写真が刷り込まれている。戦前沖縄から大阪に渡った祖父が撮った昭和初期の写真である。今は無い甲子園の浜で、同郷人とともに談笑している写真である。升目に浮かぶ写真。普通の庶民の家族写真である。

(美術家/きんじょうみつる)

## ～Sweet400シリーズによせて～ 400年の淘汰とミーム

杉尾 幸司

薩摩藩島津氏が琉球王国に侵攻した1609年の200年後、ある偉大な自然科学者がイギリスで誕生した。進化論で有名なチャールズ・ダーウィン Charles R. Darwin (1809-1882年)である。彼は、その50年後に自然選択による進化論を展開した『種の起源 The Origin of Species』(1859年)の初版を刊行する。そのため、今年(2009年)はダーウィン誕生200周年、『種の起源』出版150周年にもあたる。

ダーウィンと聞いて「弱肉強食」と答える人々がいるが、それはダーウィンが唱えたことではない。逆に、彼の唱えた説とは大きく異なる世界観である。「適者生存」とは強者が生き残ることを意味しないし、数の多い者が生き残ることをも意味しない。環境にもっとも適応した結果の適者なのであるから、環境そのものの変化によって適者は変遷することになる。

人々の価値観やものの考え方なども、歴史を通じてあたかも遺伝的進化のように伝わっていると感じる事がある。そのため、人々の間を連綿と伝わっていく価値観などを「伝統文化のDNA」などという表現をする場合がある。文化が継承・伝播されていく様子を生物進化の中の遺伝子になぞらえた比喩的表現だと思うが、比喩として適切な表現ではない。そもそも、遺伝子とDNAは同義ではない。DNAの塩基配列情報が遺伝子としての役割を担っているのであって、DNAそのものは糖とリン酸と塩基から構成されている単なる物質に過ぎないのであるから、この場合はせめて「伝統文化の文化的遺伝子(自己複製子)」という表現にしなければならない。実は、この文化的遺伝子に相当する概念として、リチャード・ドーキンス Richard Dawkins が著書『利己的な遺伝子 The Selfish Gene』のなかで、ミーム meme という用語を提唱している。ミームは、生物進化アルゴリズムの文化への適用という形で提案されたものである。したがって、「伝統文化のDNA」ではなく、「伝統文化のミーム」が正しい表現になる。

かなり長い前置きになってしまったが、今回の金城満展のテーマである「薩摩の琉球侵攻以降の歴史400年」のミームは、今の沖縄に生きる人々の間でどの様に形成されて、今後どの様に伝えられていくのであろうか。

薩摩の琉球侵攻の30年ほど前、日向国中南部を

支配していた戦国大名日向伊東氏は、島津氏の侵攻によって国を追われる。私事で恐縮だが、私の先祖は当時伊東氏の勢力下にあったため、伊東氏の敗北に伴って領地を追われることになった。しかし、系図を追っていくといつの間にかまた元の領地に戻ってきて現在に至っている。その土地に土着の勢力として生き続けてきた人々は、守護地頭として下向してきた戦国大名とは異なるネットワークを独自に持っていたのではないだろうか。



「Sweet400-blue sugar-」 顔料、膠、箔、油彩、板 116 × 180 cm

近世以前の歴史書は、主に支配者の視点からの記録であろう。薩摩の琉球侵攻について語られるとき、当時の琉球王朝の支配階層からの視点であることが多いのはなぜだろうか。自然界も人間の社会も人々が織りなす歴史の姿も、眺める角度によって多様な姿が写し出されるのではないだろうか。薩摩による琉球侵攻以前に、琉球王国によって侵攻され征服・従属させられた奄美諸島や先島諸島側からの視点は、400年の間に淘汰されてしまったのであろうか。王国の中で抑圧されてきた民衆の視点から眺めると、もっと違った風景が見える気がするのだが、このようなミームは琉球処分やアメリカの統治という淘汰圧の中では広がることが難しかったのかもしれない。

環境の変化によって適者は変遷する。そうだとすれば、これらの淘汰圧が弱まったとき、どのようなミームが適応し繁栄していくのであろうか。いずれにせよ、その時代にもっとも影響力を持つミームの姿が、未来の沖縄像を写す鏡になることは間違いないであろう。

「不協和音と二重性、過剰な依存性、升目に浮かぶ亡霊たち...」、金城満の作品に込められたミームが、これからの沖縄の中でどの様に伝わっていくのか楽しみにしている。

(琉球大学准教授/すぎお こうじ)

## 工工四に込められた、声なき声を聴く

三島わかな

あたかも、地層を連想させるような、顔料の重ね塗りから生みだされる質感は、四百年という歳月の積み重ねと、その重みを感じさせる。それはすなわち、作者である金城満氏の思考の過程であり、彼の思考の過程は同時に、沖縄の思考の過程として一体化している。沖縄の心の、より奥ふかい層にまで降りてゆくような感覚に捕われてしまう。その作品は、工工四をモチーフとしている。

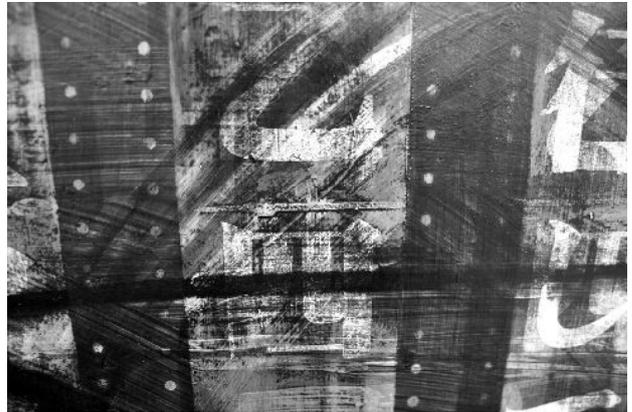
今日、現存する最古の工工四は、十八世紀末につくられた「屋嘉比工工四」である。それは、どのような楽譜かという、現在みるような工工四とは形態が少々異なっていて、升目のない、いわば「書き流し工工四」である。升目がないということは、三線音楽のリズムを、そこから読みとることができず、したがって、現存する最古の工工四は、三線演奏のためのプライベートな覚え書き程度の機能性しかなかったと思われる。そこには、他者の存在、すなわち三線音楽の奏法を、外部へと伝承しようという意識がまったく感じられない。ただ、三線奏者として屋嘉比が存在した重みを、ひしと感じるのみである。というのも当時は、口伝によるダイレクトな伝承法だったため、伝承に際して、いちいち楽譜を書き記すことなど不要だったのだろう。

その後、琉球国にも押し寄せることとなった近代化という大きな大きな波は、工工四の役割や機能性までもドラスティックに変化させた。すなわち近代以降の工工四は、これまでの「備忘録」の域から、あらたに「保存」という意識を身につけ、さらには「普及と伝承」という、近代ならではの機能性をかねそなえることとなった。プライベートな域から、大衆を意識した公的なものへと、楽譜としての工工四のスタンスが、この時、変化したのだ。

その際に、視覚面での大きな変化として、従来の、縦線も横線もない「書き流し」の形態から、「升目」へと変化した。琉球国の最後の国王となる尚泰から編纂の命をうけた野村安趙は、1869(明治2)年、升目を導入することによって、拍節を明確に伝える工工四を確立させた。それは現在、「野村工工四」もしくは「欽定工工四」と呼ばれ、以後、「升目」は工工四のシンボルとなった。

工工四に生じた次の大きな転機は、廃藩置県から約三十年後の明治末期のことだった。そこにみる変化は、工工四そのものの改良では

ないが、楽譜に対する考え方が変化した。すなわち、沖縄という垣根を越えて、いわばポードレスに三線音楽を普及し、伝承のあり方を普遍化する目的から、「工工四を五線譜に翻訳する必要性」が盛んに説かれた。現代におきかえて言うならば、国際語としての英語に翻訳するようなものである。それを牽引したのが山内盛彬や宮良長包であり、いずれも沖縄音楽の近代化を押し進めた教育人である。さらなる転機は、1935(昭和10)年に世禮國男が発案した「声楽譜付工工四」である。ここでは新たに、歌唱部をも含めて歌三線演奏の総体を固定化し、書きとどめることに尽力されている。



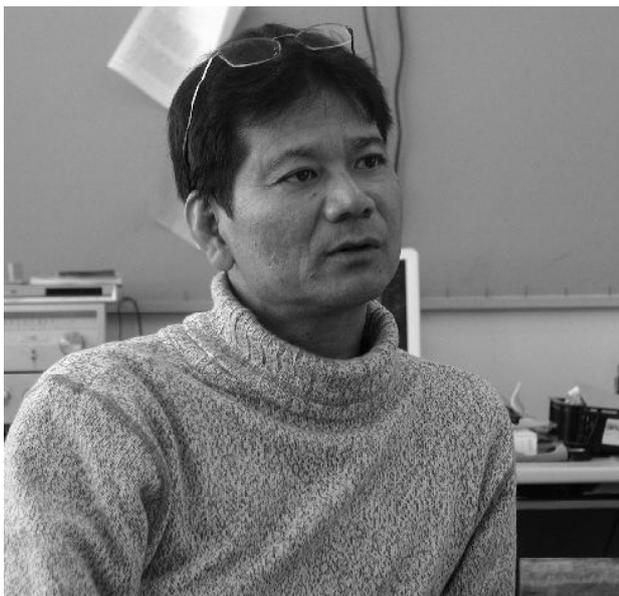
Sweet400-double sugar-(部分)

このように、工工四の歴史に想いをはせるとき、かつて、尚泰王の時代が「升目」に託した切なる思いは、まさに近代世界へと臨むべき決意のようにさえ感じられる。今回、金城氏は、この四百年の沖縄の歴史を工工四に重ねあわせることによって、ひとつひとつの「升目」に、いや、個々の「升目」の連なりを歌三線で演奏することによって、表現されては、すぐに立ち消えゆく響きに、どういった想いを託したのだろうか…。作者の想いはともかくとしても、彼の作品には、より多くの可能性がうごめき、ひしめきあい、潜在し、そして潜伏しているようにさえ感じる。観るもののイメージーションを、さまざまに掻きたてる。

歴史の叙述とは、そもそも人為的であり、個々の事象が書き記されてはじめて「歴史」と化す。そこには、書き記された事象よりも、はるかに多くの「闇」へと消え去った事象がある。金城氏の作品に、そっと耳をそばだててみると、四百年間にわたる声なき声も、聴こえてくるではないか！

(県立芸術大学講師／西洋音楽史、近代沖縄音

楽史／みしま わかな)



制作の合間にて

2008.11

## 金城満と Install-1609 企画展について

金城満氏に今回の特別企画展 = Install-1609 = の趣旨内容を話したのは、昨年正月を過ぎたころだった。企画書に目をやるなり「ほい来たか」という印象で受け止めてくれた。1609年の薩摩の琉球侵略支配から今年2009年は、ちょうど400年の節目の年にあたる。薩摩侵攻以降の江戸時代から琉球処分、皇民化教育、沖縄戦、米軍統治、日本復帰と歴史をなぞり、金城氏らしい自在な切り口で、話題が飛び交い会話が弾んだ。やがて現在の沖縄の状況論に話しがおよぶと、「アメとむち政策」、「巨大化する米軍基地」、「癒しの島」、「観光産業」、「不労所得」「全国一高い失業率」、課題山積の現実に表情が曇った。地元住人の我々が感じる「沖縄像」と観光客や外から眼差される「沖縄像」が乖離した現実があること。消費されるアイテムと虚像化し、「肥大する沖縄像」がまかり通る不思議な現実、など、。未来の沖縄像に「不安」が共振した瞬間だった。

制作の途中、私はたびたび金城の制作現場を訪ねた。昨年3月から制作を開始しているのだが、訪ねるたびに画面が変化していった。

私は正直驚いた。なかなか着地点が見いだせないのだろうか。側から見れば十分完成度の高い作品の出来映えである。画面の桐板に下地を塗り、箔を貼り、描き、削り落とす。また描き、箔を貼り削り落とす。浮上してきたイメージと作家自身の内部のイメージがかみ合わないのだろうか。400年の歴史が作家の身体に憑依したのか、何度も何度も描き、削る。去来するイメージと会話するかのようにならぬイメージを金城は重ね続けた。

この多重層に集成したイメージにたどり着くまで金城はどのような思いを抱いたのだろうか。深い歴史の闇の中を、手探りで夢遊病者のように歩き回り、探索したに違いない。400年を振り返ると言うテーマが、あまりに重いのだ。歴史の経緯と様々な事象と向き合い、自問自答し制作している姿には頭が下がった。

ある時、金城は制作のテーマとなった「Sweet」について語ってくれた。「甘い、気持ちよい、人なつっこい、これはほとんど麻薬のようなものだ」と。さらに個々の作品名になった Sugar = 砂糖のことを話し始めた。「シルクロードは水平線の交流、シュガーロードは垂直線の交流でイメージできる。つまり、人々の長い歴史において、シルクロードは富める（強国）国同士の交流、シュガーロードは北の富める国と南の貧しい国の交流にほかならない。」と。乱暴な解釈かも知れないが、言い換えればシルクロードは対等の関係、シュガーロードは差別の関係に見える。

今回展示された金城氏の作品の前に立っていると、立ち眩みやめまいのような感覚に襲われる。二重三重に重層したイメージが見る側の身体を揺さぶり、「何か」を問いかけてくるのだ。つまり「誰か、何か」が正常な状態ではないのだ。

400年の歴史の中で刷り込まれ、染み込み潜伏する「何か」、明確に言葉に出すことは出来ないけれども、確かに何か「おかしい」、「変である」、自覚出来ない中毒に近い「何か」。金城氏の作品は、無自覚な神経を揺さぶり、沖縄の「自立」と沖縄人の「自律」と「自覚」、「主体性」を問いかけているようだ。

(画廊主／上原誠勇)